

増加を続ける国民医療費・個人の生涯医療費



保険研究部 准主任研究員 村松 容子
yoko@nli-research.co.jp

1—— 2015年度国民医療費は 42兆円3,644億円

2015年度の国民医療費と2016年度の概算医療費*1が、それぞれ厚生労働省から公表された。

医療の高度化や寿命の延伸等によって、医療費は毎年およそ1兆円ずつ増加しており、2015年度には42兆3,644億円となった。2016年度は、14年ぶりに減少する見込みであるが、高額医薬品の価格引き下げによる一時的なものであり、医療費が増加基調であることに変わりはない。

国民一人ひとりの生涯医療費*2も増加しており、2015年度データでは、男性が2,580万円、女性が2,820万円だった（10割負担として計算）。この男女差は、平均寿命の差*3と疾病構造の違いによる。

本稿では、国全体、および個人の医療費支出状況を紹介する。

2—— 国全体の医療費支出の動向

1 | 国民医療費の範囲

国民医療費とは、医療機関等で保険診療の対象である傷病の治療に要した費用を言う。健康診断や大衆薬等の予防・健康増進分野、先進医療等の研究開発分野、差額ベッド代等の生活サービス等分野、介護等分野は含まない。

2 | 医療費支出の内訳

(1) 医科診療が医療費総額の7割。

増加しているのは薬局調剤

国民医療費を、医科診療（入院・入院外）、歯科診療、薬局調剤といった診療種類別

にみると、2015年度の国民医療費約42兆円のうち、医科診療が約30兆円と全体の7割を占めて最も多く、次いで薬局調剤が約8兆円と続く[図表1]。医科診療を入院・入院外別にみると、入院が約16兆円、入院外が約14兆円と、入院が高い。

[図表1] 国民医療費の診療種類別内訳推移

年	総数	医科診療		歯科診療	薬局調剤	入院時食事・生活	訪問看護	療養等	その他	
		入院	入院外							
2008	35	25	13	2.6	5.4	0.82	0.06	0.51	1.39	
2009	36	26	13	2.6	5.8	0.82	0.07	0.54	1.42	
2010	37	27	14	2.6	6.1	0.83	0.07	0.55	1.45	
2011	39	28	14	2.7	6.6	0.82	0.08	0.56	1.47	
2012	39	28	15	2.7	6.7	0.81	0.10	0.56	1.47	
2013	40	29	15	2.7	7.1	0.81	0.11	0.55	1.47	
2014	41	29	15	2.8	7.3	0.80	0.13	0.55	1.48	
2015	42	30	16	2.8	8.0	0.80	0.15	0.56	1.51	
対2010	13%	10%	11%	10%	9%	30%	-3%	101%	1%	4%

5年間で医療費総額は13%増加していた。内訳をみると、医科診療で約10%、歯科診療で約9%、薬局調剤で約30%、その他入院時の食事・生活、訪問看護、療養等で約4%増加しており、最も増加が著しいのは薬局調剤だった。国の政策によって在宅医療へシフトしているため、訪問看護が5年前の約2倍にまで増加しているが、他診療種類と比べて総額が小さいため、今のところ影響は小さい。

医療費増加の要因として、人口増の影響（2008年度以降はマイナス）、高齢化の影響、診療報酬改定、その他の医療の高度化等の影響が考えられているが[図表2]、最近の医療費の伸びは、人口の高齢化と、医療の高度化等の要因によるところが大きい。特に2015年度は、前年に比べて伸び率が大きい。特に2015年度は、前年に比べて伸び率が大きい。特に2015年度は、前年に比べて伸び率が大きい。特に2015年度は、前年に比べて伸び率が大きい。

(2) 60歳以上の医療費が総額の7割

性・年齢群団別の医療費支出構成を人口構成と比較すると、男女とも医療費は

[図表2] 要因別医療費の対前年度伸び率

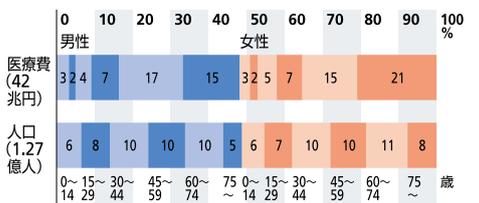
	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015
医療費の伸び率(対前年度)	2.0	3.4	3.9	3.1	1.6	2.2	1.8	3.8
診療報酬改定(消費税対応分を除く)	-0.82		0.19		0.004		-1.26	
人口増の影響	-0.1	-0.1	0.0	-0.2	-0.2	-0.2	-0.2	-0.1
高齢化の影響	1.3	1.4	1.6	1.2	1.4	1.3	1.2	1.2
診療報酬改定のうち消費税対応分							1.36	
その他(医療の高度化、患者負担の見直し)	1.5	2.2	2.1	2.1	0.4	1.1	0.6	2.7

高齢期に集中しており[図表3]、全人口の34%程度である60歳以上が医療費総額の7割近くを使っている。

男女を比較すると、男性の医療費が全体の48%で女性の医療費が52%だった。人口は、男性が49%、女性が51%なので、おおむね人口に応じて女性の医療費が多くなっている。

[図表3] 医療費構成と人口構成(2015年)

資料：医療費構成は厚生労働省「平成27年度国民医療費」、人口構成は総務省統計局「平成27年国勢調査」



(3) 男女とも中高年以降で循環器系の疾患と新生物による医療費が高い

図表4は、国民医療費の7割を占める医科診療費の疾病分類別構成(構成比で上位3疾病)を示している。男女とも中高年以降では循環器系の疾患と新生物が上位を占める。

新生物の構成比が高いのは、男性が45歳以上であるのに対し、女性はそれより若い15歳以上である。乳がん、子宮がん等女性特有のがん患者が比較的若いことによる。

男性でのみ上位となっている疾病は、44歳以下では骨折等の損傷、中毒及びその他の外因の影響、65歳以上では前立腺



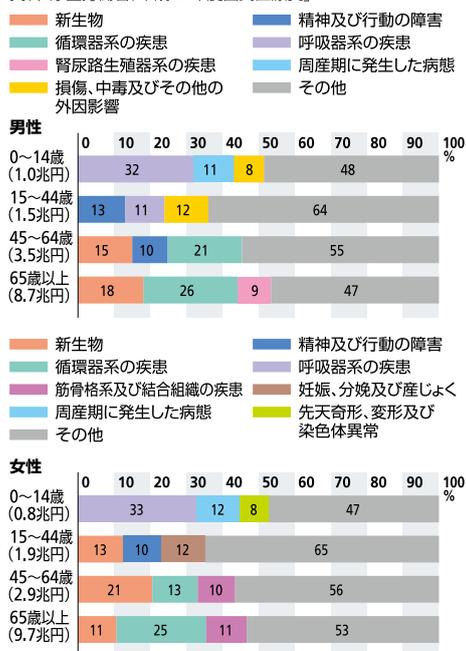
むらまつ・ようこ

京都市立大学大学院理学研究科修士課程修了。
03年ニッセイ基礎研究所。17年7月より現職。
主な著書に「みんなに知ってほしい 不妊治療と医療保障」(共著)。

の疾患等の腎尿路生殖器系の疾患である。一方、女性でのみ上位となっている疾病は、15～44歳では妊娠、分娩及び産じょくと、45歳以上では関節症や骨粗しょう症等の筋骨格系及び結合組織の疾患である。65歳以上の女性では、筋骨格系及び結合組織の疾患による医療費は、新生物と同程度のウエイトを占めて高い。

【図表4】疾病分類別医療診療費(性年齢別上位3疾病)

資料：厚生労働省「平成27年度国民医療費」



男女とも中高年以降で、循環器系疾患と新生物の医療診療費が並んで高く、大きな差はないが、総患者数^{*4}では大きな差があり、循環器系疾患が新生物の4～10倍と推計されている(厚生労働省「2014年患者調査」)。また、65歳以上の女性で、新生物と筋骨格系及び結合組織の疾患の医療診療費が同程度であるが、総患者数では、筋骨格系及び結合組織の疾患の患者は新生物患者の5倍程度と推計されている。

すなわち、医療費は、新生物のように、患

者数は少ないが患者一人あたりの医療費が平均して大きいケースと、筋骨格系及び結合組織の疾患のように、患者一人あたりの医療費は平均すると小さいが患者数が多いことによって高くなっているケースがある。

3—— 個人の医療費支出の動向

1 | 70歳以上で生涯医療費の半分

個人の生涯医療費は、2015年度のデータで男性が2,580万円、女性が2,820万円だった【図表5】。男女とも70歳以上で生涯医療費のおよそ半分を使う(男性47%、女性53%)。

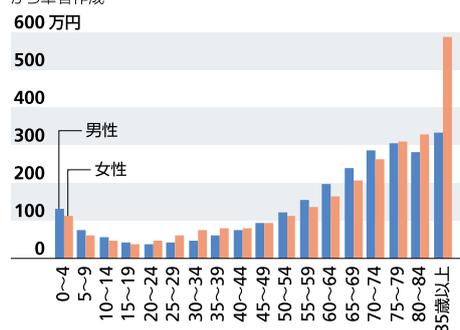
男女を比較すると、20～49歳と75歳以上で女性の医療費が高い。20～49歳の女性の医療費は、この年代の女性特有の「妊娠、分娩及び産じょく」によって、同年代の男性を上回ると考えられる。

女性の85歳以上が極端に高くなっているのは、年齢別の内訳を5歳刻みで表記しているのに対し、85歳以上は死亡するまでを合算しているからである。その期間は、男性平均6.22年、女性平均8.30年(85歳の平均余命)である。

生活医療費も、時系列でみると増加している。

【図表5】生涯医療費推計の年齢別内訳

資料：厚生労働省「平成27年度国民医療費」[第22回完全生命表]から筆者作成



4—— おわりに

以上みてきたとおり、2015年度の医療費は42兆3,644億円と過去最高となった。診療種類別にみると、内科診療がその7割を占め、30兆円程度である。内科診療、歯科診療、薬局調剤等いずれの診療種類も上昇傾向にある。特に薬局調剤が5年間で30%と、他の診療科目と比べて大幅に増加している。昨今の医療費の増加は、高齢化だけでなく、医薬品の価格上昇等の医療の高度化による影響が大きい。従って、現在、厚生労働省で議論が進められている薬価の抜本改革の国民医療費総額への影響も大きいと考えられる。

男女とも中高年以降では新生物、循環器系の疾患による医療費が高くなっている。男性でのみ医療費が高い疾病は、年齢により損傷、中毒及びその他の外因の影響や腎尿路生殖器系の疾患である。また、女性でのみ高い疾病は、年齢により妊娠、分娩及び産じょくや関節炎等筋骨格系及び結合組織の疾患である。

疾病分類別医療費は、新生物のように、患者数は少ないが患者一人あたりの医療費が平均して大きいケースと、筋骨格系及び結合組織の疾患のように、患者一人あたりの医療費は相対的に少ないが患者数が多いことによって高くなっているケースがある。

【*1】概算医療費は、審査支払機関の算定ベースの診療報酬の集計であり、はり・きゅう、保険証忘れ等による全額自費支払い、労働者災害補償保険等による医療費は含まない。そのため国民医療費の98%程度で推移している。

【*2】生涯医療費とは、年齢別1人当たり国民医療費及び年齢別死亡率が変化しないとした場合に、1人の人が生涯で必要となる平均医療費を推計したものである。厚生労働省による「平成27年度国民医療費」と「第22回完全生命表」から筆者が計算。

【*3】厚生労働省「2016年簡易生命表」によると、平均寿命は男性が80.98年、女性が87.14年である。

【*4】継続的に医療を受けている者の数を推計したものである。